

聖書日課 『からし種』 2024.6.2-6.9

<p>6月2日 (日)  雅歌 3章</p>	<p>「彼らに別れるとすぐに／恋い慕う人が見つかりました。つかまえました。もう離しません」(4節)。愛は、恋い慕う相手と共にあることを切に求める。相手の存在が深く自分の体の一部になっているから。同じように、神は私たちと共にあることを切に望まれ主イエスを送ってくださった。私たちを見つけ出し、礼拝に招いておられる方の熱い招きを覚えて共に集おう。</p>
<p>3日 (月)  雅歌 4章</p>	<p>「恋人よ・・・あなたは美しく、その目は鳩のよう」(1節)、「あなたのひと目も、首飾りのひとつの玉も／それだけで、わたしの心をときめかす」(9節)。恋人の瞳を想像しただけで若者の心はときめき、その鼓動は大きく高まる。私たちはこれほどまでに主イエスを慕う信仰に生きているだろうか。「今日その声を聴かせてください」と祈ることから始める一日とされて。</p>
<p>4日 (火)  雅歌 5章</p>	<p>「恋しい人の言葉を追って／わたしの魂は出て行きます。求めても、あの人は見つかりません。呼び求めても、答えてくれません」(6節)。おとめと若者は互いに恋しい間柄でありながらもすれ違い、出会えない。けれども出会えないからこそ、互いの思いは高められていく。私たちも神をなかなか捕らえられなくても、神を慕い求める信仰をいただくことができるように。</p>
<p>5日 (水)  雅歌 6章</p>	<p>「王妃が六十人、側女が八十人／若い娘の数はしれないが／わたしの鳩、清らかなおとめはひとり」(8-9節)。王が王妃や側女を何人持ちえたとしても、心から愛することができるのは一人だけ。なぜなら創造主なる神が人をそのように造られたから。「彼に合う助ける者」(創世記 2:18)とは、「向かい合い、共に荷を担ぐ者」。わたしは今日誰と向かい合うのか。</p>

大井バプテスト教会

聖書日課 『からし種』 2024.6.2-6.9

<p>6日 (木)</p> <p>雅歌 7章</p>	<p>「気高いおとめよ／サンダルをはいたあなたの足は美しい」(2節)。若者が恋しい人を思っうたい上げる歌に終わりはない。彼女のからだのすべての部分が若者には喜びだから。彼女のほんのわずかな残り香さえもが、若者の心を高ぶらせる。私たちが神を求める思いの数千倍もの熱さをもって、神は私たちを「価高い者」(イザヤ 43:4)と見てくださっている。</p>
<p>7日 (金)</p> <p>雅歌 8章</p>	<p>「大水も愛を消すことはできない／洪水もそれを押し流すことはできない」(7節)。13年前の大震災で教会も牧師館もすべてを津波で失った牧師がおられる。「家、財産、仕事、家族、すべてを失ったヨブ」のように言葉を失い、途方に暮れたという。けれども長いトンネルの後に「どんなに物質的に豊かに持ち得ても、無くてならぬものは神の愛と示された」と語られた。</p>
<p>8日 (土)</p> <p>イザヤ 1章</p>	<p>「天よ聞け、地よ耳を傾けよ、主が語られる。わたしは子らを育てて大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた」(2節)。イスラエルの人びとは礼拝といけにえと祈りを欠かすことはなかったが、「主の言葉に聴くこと」を忘れた礼拝は「重荷でしかない」(14節)と、主は厳しく退けられた。主が第一に求めておられることを、わたしたちも第一に求めることができるように。</p>
<p>9日 (日)</p> <p>イザヤ 2章</p>	<p>「国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない」(4節)。人の役に立てるための技術、自然のしくみを知るための科学が、鋤や鎌を剣や槍に打ち直すかのように軍事利用され、「戦うための学び」がどんどん簡単になっている。自国は手を出さず他国の戦いで利益を得るのも、戦っているのは同じ。戦うことではなく、愛することを聖書から学ぼう。</p>